

Title	大学生による「探究」への効果的な関わり方の研究 ：大阪府北部の高等学校における実態調査から考える
Author(s)	
Citation	令和2（2020）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書
Issue Date	2021-04
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80634
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

令和2年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふ り が な 氏 名	ふじい たくみ 藤井 拓海	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	2年				
ふりがな 共 同 研究者氏名	くりたに ゆうき 操谷 悠希	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	2年				
	たての ひとみ 立野 瞳		人間科学部 人間科学科		2年				
	たきがわ はるき 滝川 陽稀		経済学部 経済経営学科		2年				
	まつだ ゆういち 松田 祐一		理学部 生物科学科生 物化学コース		2年				
	えのもと なおき 榎本 直紀		基礎工学部 情報科学科		2年				
	おおおか あみ 大岡 亜美		基礎工学部 電子物理科学 科物性物理科 学コース		3年				
アドバイザー教員 氏名	さとう いさお 佐藤 功	所属	人間科学研究科						
研究課題名	大学生による「探究」への効果的な関わり方の研究 —大阪府北部の高等学校における実態調査から考える—								
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）								

目次

1. 研究概要

2. 研究目的

4. 研究経過

5. 研究結果・考察

<①「総合的な探究の時間」の実施状況に関する調査>

<①の考察>

<②「総合的な探究の時間」における外部との連携状況に関する調査>

<②の考察>

<③「総合的な探究の時間」における、大学生との連携への期待度に関する調査>

<③の考察>

<④「総合的な探究の時間」の課題に関する調査>

<④の考察>

<⑤「探究」を通じて生徒に身につけて欲しい技能・能力に関する調査>

<⑤の考察>

6. 大学生の効果的な関わり方と留意点

<大学生の効果的な関わり方>

<①アドバイザー>

<②TT (Team Teaching)>

<③コミュニティ作成者>

<関わる上での懸念点>

<追記>

7. まとめ・今後の展望

8. 参考文献

1. 研究概要

本研究は、高等学校における「総合的な探究の時間」（以下、「探究」。学習指導要領の改定に伴い2022年度より本格的に実施予定で、現在一部の高等学校が先行実施している。※1）の実情を調査し、それを踏まえて、大学生による「探究」への効果的な関わり方を考察した。調査手法は大阪府内（主に北部）の高校教員を対象に実施したアンケート調査並びにインタビュー調査である。

本研究は、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、当初の予定から変更を余儀なくされた。アンケート調査並びにインタビュー調査では、以下の項目について質問を行った。

表 1) アンケート調査並びにインタビュー調査の項目

① 「総合的な探究の時間」の実施状況に関する調査
② 「総合的な探究の時間」における外部との連携状況に関する調査
③ 「総合的な探究の時間」における、大学生との連携への期待度に関する調査
④ 「総合的な探究の時間」の課題に関する調査
⑤ 「探究」を通じて生徒に身につけて欲しい技能・能力に関する調査

大阪府内の高等学校 30 校以上にアンケートを依頼し、17 校から回答があり、うち 5 校でインタビュー調査を行った。これらの調査より「探究」の実情に関して、以下のことが推察された。

- 現時点では、高等学校は外部組織と、長期的な連携より短期的な連携を行っている。
- 「探究」実施校は、概ね大学生との連携に好意的である。
- 大学生には、自らの研究内容を伝えた上で、斜め上の立場から伴走的にサポートできる点で連携に有効である可能性がある。
- 「探究」のプロセス（課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現）のうち、学校現場は「課題の設定」と「整理・分析」の指導に対して問題を抱えている。
- 学校内での「探究」の意義・目的の共有は、授業内容ないし評価方法、ひいては探究学習全体の充実度につながる。
- 学校での人手不足が、探究学習の充実を阻害している。
- 高校教員は生徒に対して、能動的に活動に取り組む力を求めている

また調査結果を踏まえ、大学生による「探究」への効果的な関わり方や連携に際しての懸念点/留意点を表 2 のように考察した。

表 2) 大学生による「探究」への効果的な関わり方・連携に際しての懸念点/留意点

「探究」への効果的な関わり方	連携に際しての懸念点/留意点
1. アドバイザー 2. TT (Team Teaching) 3. コミュニティ作成者	1. 大学生のモラル 2. 大学生のキャパシティ 3. 大学生のクオリティ 4. 大学生との調整コスト 5. 金銭的成本

以下の項目で、具体的な研究結果と考察を記載する。

2. 研究目的

本研究は、高等学校における、「探究」の実情を調査し、それを踏まえて大学生が学校現場に対してどのような関わりができるのかを探ることを目的とする。

「探究」の実情とは、具体的に

- ・ 「探究」の授業での取り組み
- ・ 高校生の「探究」の授業への満足度

・高校教員の「探究」の授業にかかる負担を指す。

私たちは大阪大学教職履修生有志で、高大連携教育団体『SUIT』を結成した。本研究の着想及び弊団体結成の目的は、高校生と年齢の近い大学生が関わるにより、「探究」のもつ学習効果を高め、準備、実施にかかる学校現場の負担を軽減することである。私たちは高校教員の研究会に参加することで、「探究」の授業作りや移行準備に苦慮している現状を知り、大学生が「探究」に貢献できる可能性を考えた。そして、2020年2月には大阪府立渋谷高等学校で、「探究」の時間に約100名の高校生に向けて活動を行った。阪大生が自身の大学生活について話したり、教科教育の魅力を伝えたりするワークショップを通して、高校生の大学進学へのモチベーション向上に寄与できた。そういった活動の中で、大学生による協力には高校現場からの確かなニーズがあることを私たちは実感した。しかし、客観的な数値として「探究」の現状と「探究」における高大連携の可能性を知るには至っていなかった。「探究」に関する客観的なデータと、大学生が関わる高大連携の理想形を探るため、本研究を行うこととした。

3. 研究計画

昨年6月に提出した申請書・研究計画書に記載した研究計画は下記の通りである。

6～8月末)

アンケート調査質問項目決定、アンケート実施候補高校リストの作成

9月初旬～9月末)

大阪北部（豊能地区・三島地区・北河内地区・中河内地区・大阪市）の高校生・高校教員にアンケート配布。（「探究」担当者宛に送付。）また、高等学校に赴き高校生・高校教員を対象にインタビュー調査を実施。約100人へのインタビュー調査を予定。

10月～11月)

アンケート回収。並行して高校生や高校教員へのインタビューを行う。

11月) 高校教員対象（約30名）のイベント（勉強会）を行い、アンケート・インタビュー調査を実施（オンライン実施の可能性あり）

～11月末) 大学生の学校現場への関わり方を探り、高大連携実施計画案を作成。

～12月) 実施計画案をもとに連携プログラムを実施

研究報告会を実施又は研究報告書を作成

上記と並行して、大学教授や研究会に所属する高校教員等を対象にインタビュー調査を行う。

<アンケートの実施において想定している方法>

- ・担当者宛に研究趣旨/アンケートを送付し、その後電話/メール等で確認を行う。
- ・場合によっては実際に高等学校へ赴き（又はzoom等で）直接説明を行う。高校生へのアンケート配布の協力も依頼する。

4. 研究経過

本研究は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響や研究の進捗を考慮し、規模を縮小して実施した。具体的には、11月に実施予定であった高校教諭対象のイベントや、12月に予定していた、連携プログラムの実施を中止とした。また、高校生へのアンケート調査も今回は見合わせた。

6月～9月にかけて高校教員対象のアンケート調査項目を作成した。当初の予定より1ヶ月ほど完成が遅れた要因としては、質問内容が想定以上に増えたことや、オンライン通話ツール上での作成作業に不慣れであった点などが挙げられる。

大阪府内の高等学校30校に10月よりアンケートを郵送で配布し、追加で11月に実施された大阪大学教職課程総合実践演習振り返り会に出席した高校教員を対象に google フォームでの回答を依頼した。その結果、17校（紙：7校、Google フォーム：9校、word 形式：1校）より回答いただいた。4校は匿名での回答であり、他13校の分布は次の通りである。

3校：豊中市、

2校：箕面市、

1校：吹田市、摂津市、高石市、高槻市、枚方市、寝屋川市、大阪市、池田市

私学：1校 県立：12校

各高校から1人、「探究」担当の教員に回答を依頼した。

回答者の役職名は高等学校により様々であり、独自で以下のように分類した。

表 3) 回答者の属性の分類

回答者の属性の分類	
・「探究」担当者：10名 (総合学習主任、探究プロジェクトチームメンバーなどを含む)	
・教諭：2名	
・教務主事：1名	
・学年副主任：1名	
・無回答：3名	計 17 名

さらに、アンケートに回答いただいた高等学校のうち、5校計5名の教員を対象に各30分～1時間ほどインタビューを実施した。（対面：1校、zoom：3校、電話：1校）

5. 研究結果・考察

アンケートは、15ページ計13問で構成されている。「探究」を実施している高等学校のみ回答する設問があり、5～15分で回答できる分量となった。

設問項目を大きく5つに分けた。

- ① 「総合的な探究の時間」の実施状況に関する調査
- ② 「総合的な探究の時間」における外部との連携状況に関する調査
- ③ 「総合的な探究の時間」における、大学生との連携への期待度に関する調査

- ④ 「総合的な探究の時間」の課題に関する調査
 ⑤ 「探究」を通じて生徒に身につけて欲しい技能・能力に関する調査

以下に設問ごとの調査結果と、項目ごとの考察を記載する。

<① 「総合的な探究の時間」の実施状況に関する調査>

質問①-1:現在、貴校で「総合的な探究の時間」は実施されていますか。

表 4) 質問①-1 の回答結果(有効回答数:17)

質問①-1	回答数
1. 全学年で実施されている	2
2. 1年生でのみ実施されている	0
3. 2年生・1年生でのみ実施されている	10
4. 一部コースでのみ実施されている	1
5. まだ実施されていない	0
6. 2020年度に実施予定だったが、新型コロナウイルスの影響で実施を見合わせた	1
7. その他	3

その他の回答:「2年生のみ」「2年生のみ再来年度入学者からの本格実施に向けた試行実施をおこなっている」「2020年度に実施予定だったが、コロナウィルスの影響で12月から2年生のみ実施予定。」

質問①-2:現在、貴校における「総合的な探究の時間」の授業内容は、「総合的な学習の時間」に比べて、「探究学習」を重視した内容になっているとあなたは思いますか。

表 5) 質問①-2 の回答結果(有効回答数:15)

質問①-2	回答数
1. なっていると思う	9
2. どちらかと言えば、なっていると思う	3
3. どちらとも言えない	1
4. どちらかと言えば、なっていないと思う	1
5. なっていないと思う	1

<① の考察>

今回の調査校のうち、多くの高等学校が「探究」を実施しているという結果になった。
 また、調査校のうち多数の高等学校が、「探究」の授業内容が「総合的な学習の時間」に比べて探究学習をより重視した内容となっていると回答した。

<②「総合的な探究の時間」における外部との連携状況に関する調査>

質問②-1: 貴校の「総合的な探究の時間」において、外部組織と連携した取り組み・授業展開を行なったことがありますか。また、現在行なっていますか。(有効回答数: 15)

表 6) 質問②-1 の回答結果(有効回答数: 16)

質問②-1	回答数
はい。	13
いいえ。	3

質問②-2: その外部組織とは次のうちどれに該当しますか。(複数回答可)

表 7) 質問②-2 の回答結果(有効回答数: 13)

質問②-2	回答数
1. 大学	6
2. 自治体	6
3. 企業	11
4. NPO 法人	6
5. 中学校	0
6. その他	4 (国際交流協会、商工会議所、社会福祉協議会、医療法人、ジャーナリスト、関西 NGO 協会など。)

企業が 11 校と一番多く、その次に自治体、NPO、大学が 6 校ずつで続いている

質問②-3: その外部組織とは、具体的にどのような連携を行なっていましたか。また、行なっていますか。【記述回答】

表 8) 質問②-3 の回答結果(有効回答数: 12)

外部組織との連携内容
<ul style="list-style-type: none"> • 大学生が自分の経験を一方的に話す（シアター型） • 企業・NPO 法人などの講義、講演 8 校 • 助言、個別指導 2 校 • ワークショップ 2 校 • 探究プログラムを扱う企業との連携 • 大学や研究所訪問 • 研究テーマの設定、提案（市政に活かせる課題研究のテーマを考えてもらい、それについて生徒が研究する。） • 発表へのフィードバック（企業—研究発表に企業の CSR 部門の立場からコメント。）

- ・ インタビューなど。
- ・ 授業におけるサポート。
- ・ 依頼、インターン（仮想）。
- ・ 進路について考える自己探究として分野別説明会。
- ・ 現在進行中の2年後期「SDGSを考える」で関西 NGO 協会の方の講演を行う。

回答された連携形態は、講義講演といった生徒に知識のインプットを促す形態や、個別指導などの伴走者的な形態など、多岐にわたる。現時点では、長期的な連携より短期的な連携が多く、外部組織と協働でカリキュラム作成を行なっている高校はなかった。

質問②-4:今後、貴校での「総合的な探究の時間」において、外部組織との連携を検討していますか。検討している場合、連携内容について簡潔に記述してください。

表 9) 質問②-4 の回答結果(有効回答数:3)

質問②-4	回答数
1. 検討している。	2
2. 検討していない。	1
3. どちらとも言えない・わからない	0

連携内容については、1校から「課題研究の際に大学教授や大学生からアドバイスを受ける」という旨の回答があった。

質問②-5:外部組織との連携を計画する場合、生じるとされる問題がありますか？(複数回答可)

表 10) 質問②-5 の回答結果(有効回答数:2)

質問②-5	回答数
1. 外部との連携に十分な予算を割くことが出来ない	1
2. 外部組織との繋がり方が分からない	0
3. 連携を企画する時間がない	0
4. 連携しようとする教員がいない	1
5. 周りの教員の理解を得られない	0
6. 特になし	0
7. その他	0

<②の考察>

「探究」を実施している16校のうち、外部と連携しているのが13校、していないのが3校という結果になっており、基本的に外部と連携していると言える。「探究」で外部組織と連携した取り組み・授業展開を行ったことのない3校のうち、2校は連携を検討していると回答した。3校が連携活動を実施していない理由としては、「連携しようとする教員がいない」「連携に十分な予算を割くことができない」が挙げられた。

質問②-2の選択肢である「1. 大学」が、「大学教授」を表すのか「大学生」を表すのかが不明瞭であった点が反省点である。

<③「総合的な探究の時間」における、大学生との連携への期待度に関する調査 >

質問③-1:あなたは、「総合的な探究の時間」における、大学生との連携にどのくらい期待しますか?

表 11) 質問③-1 の回答結果(有効回答数:16)

質問③-1	回答数
1. 期待している。	6
2. どちらかと言えば、期待している。	6
3. どちらとも言えない。	4
4. どちらかと言えば、期待していない。	0
5. 期待していない。	0

質問③-2:どのような点において、大学生との連携は効果的だとあなたは考えますか? また、どのような形態で大学生と連携することが効果的だとあなたは考えますか? (記述回答)

この質問項目については、インタビュー調査でも聞き取りを行った。

回答を、「大学生との連携が効果的だと考える点に関する回答」「効果的だと考える形態に関する回答」とに分類し、以下にまとめた。

表 12) 質問③-2 大学生との連携が効果的だと考える点に関する回答(有効回答数:16)

大学生との連携が効果的だと感じる点に関する回答
<p><アンケート結果より></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 斜め上の立場からサポート ・ 年齢が近い/歳が近い大学生 ・ 学生さんの経験を話していただき、生徒の進路について考えさせる探究活動ができるのではないか ・ フィールドとのネットワーク ・ フィールドでの経験を伝える ・ 大学での具体的な研究内容の紹介 ・ 大学での学びを、学生の視点からリアルに語ってもらえるであろう点 ・ 生徒にとって、大学生は身近な先輩であり、目標 ・ 年齢の近い先輩と出会えるという場になればいいなと期待しています <p><インタビュー調査より></p>

- ・ 「『将来を考えている』点では高校生と同じ。ただ、大学生の方が少し先を見て考えている。『斜めの関係』『伴走者』としての立ち位置が効果的だと考える」
- ・ 「大阪大学は立地的にも（勤務校に）近い」

表 13) 質問③-2 効果的だと考える連携形態に関する回答

効果的だと考える連携の形態に関する回答
<p><アンケート結果より></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ メンター ・ TT ・ 授業者と評価者を1人で担うには無理があり、その一方を大学生に担ってもら ・ アドバイスをいただくことで、生徒たちがよりやる気になる ・ 高校の教員だけで対応すると、全員に細かいアドバイスをする時間がないが、それを少しでも解決したい。 ・ 生徒の発表等に対してフィードバックを行っていただく ・ テーマ設定、問いの設定、検証のプロセス等、各ポイントにてアドバイスをもらえる体制。 ・ 探究活動における終着点を教員と相談できる体制 ・ 単発の授業を、オンラインなどを使い実施する <p><インタビュー調査より></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究方法のアドバイス ・ 情報収集において参考文献を探す際のアドバイス ・ 高等学校の授業で使える薬品・設備が限られているので、大学の設備を利用できたら最高である ・ 会議や打ち合わせにも関わってもらいたい。 ・ この授業でこの段階まで引き上げる、という（授業内の進行状況の）線引きの共有 ・ メンターとして知識・繋がりを提供する ・ 月一でも継続的に来てほしい ・ コンテスト系に特化した指導 ・ いろんな大学生が、研究の中での問題点・気づきを共有する

質問③-3: 大学生との連携に関して、あなたが懸念されている点がありますか? ない場合、「特になし」とお書きください。（記述回答）

インタビュー調査でも同様の質問を行い、回答より導き出された懸念点を大きく5つに分類した。

表 14) 質問③-3 大学生との連携の懸念点に関する回答(有効回答数:16)

1. 大学生のモラル
<ul style="list-style-type: none"> ・ 成績に直結する評価を、教員免許を持たない学生に委任するというのは難しいであろう。 ・ あくまでも「学校を通しての連携」という枠を越えないこと。つまり、生徒との直接のやり取りや、リードが行き過ぎることなど…

- 行ってはいけないこと(例えば個人的なアドレスの交換など)についてのルールの合意ができるか。
- セクハラ

2. 大学生のキャパシティ

- 比較的長期(4～5 か月)の単位で継続的にかかわることができるか。
- 一度にクラス1人×6クラス=6人の派遣は可能か。(確保できるか)
- 大学生が継続的に来ていただけるかということ。

3. 大学生のクオリティ

- 授業者か評価者のどちらか一方を担うことになったとすれば、大学生にどこまでのクオリティを求められるのか不安である。
- 個人による熱量や技量の差
- 学生の「探究」に関わる意識、技量などにばらつきが出ないか。

4. 大学生との調整コスト

- 教員とのベクトル合わせがうまくできるか?
- 結局大学生との打ち合わせの時間の確保も難しい課題となり、逆に疲弊する原因となる可能性もある
- 日程の調整も難しいのではないか。
- 忙しい中、うまく時間を調整し、連携することができるかが不安である
- 大学の試験期間、実験、実習、アルバイトなどで、こちらの予定との調整が難しくならないか
- 多くの大学生に協力を得ようとするほど、温度差や意図の共有が難しいのではないか。
- ねらいや目標のすり合わせがちゃんとできているか

5. 大学生との金銭コスト

- ボランティアで継続的に数か月や何年も来てくれるような団体はないと認識しているため、何らかのうまみを大学生に持たせるためにはどうすべきか。
- 経費(謝礼や交通費)

<③の考察>

質問③-1より、現在「探究」を実施している高校は、大学生との連携に概ね好意的であった。

質問③-2より、大学生との連携が効果的であるという考えをもたらす、大学生の主な特性として、

1. 高校生と年齢が近く、斜め上からの伴走者的サポートが可能である点
2. 大学で学ぶ先輩として、研究内容やフィールドでの経験を伝えることができる点
3. 立地的に近く、アクセスが良いため、来てもらいやすい点

などが挙げられた。

また、想定される望ましい大学生との連携形態として、大きく6つに分類した。

1. ヘルパー
2. アドバイザー
3. TT (Team Teaching)

4. 登壇者
5. 評価者
6. その他

「1.ヘルパー」と、「2.アドバイザー」の違いとしては、前者が高等学校の人手不足を解決することが主たる目的であることに対して、後者は研究活動を行うものとして、論文指導等、高校生の探究活動へのアドバイスをを行うことを目的とする、と定義づけする。

「3.TT (Team Teaching)」は、教員とともに授業計画の段階から参与する関わり方を示すものと定義する。(詳細は、「6.大学生の効果的な関わり方と留意点」で記述。)

「4.登壇者」は、一回の授業で大学生が高校生の前で自らの経験を語る形態である。

「5.評価者」は、メンター・アドバイザー・TTなどで関わる中で、高校生の活動をルーブリック評価等を用いて評価する。

「6.その他」に挙げられた意見には、ビジネスコンテストに参加する高校生に、参加経験のある大学生がアドバイスを送るといった意見や、オンラインでの関わり方も提示された。

これら6つの関わり方はそれぞれ独立するものではなく、重なり合う要素を持っており、各学校にあった柔軟な関わり方が求められている。

質問③-3より、大学生との連携を行う際の懸念点として、

1. 大学生のモラル (大学生の倫理観やマナー、振る舞いなど)
2. 大学生のキャパシティ (大学生の時間/人員の余裕)
3. 大学生のクオリティ (大学生の指導の熱量や技量)
4. 大学生との調整コスト (大学生と連携する際の打ち合わせや意図の共有にかかる負担)
5. 大学生との金銭コスト (大学生と連携する際の謝礼や交通費)

が挙げられると考える。(詳細は「6.大学生の効果的な関わり方と留意点」で記述)

<④「総合的な探究の時間」の課題に関する調査>

質問④-1:「総合的な探究の時間」における教員間の課題点のうち、あなたが特に課題だと思う点を表1の1～11の項目から最大3つまでお選びください。次に、その原因・理由に当てはまるものを下記の項目ア～オから全て選択し、右の列にチェックしてください。

表 15) 質問④-1 課題点に対する原因・理由の選択肢

理由：ア [時間不足]

授業準備等で忙しく、議論に十分な時間が割けないから。

イ [認知不足]

探究学習そのものの理解・認知が十分でないから

ウ [人手不足]

教員数が少なく、人手が足りていないから。

エ [連携不足]

探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから

オ [期待のなさ]

探究学習による教育効果に期待していないから。

表 16) 質問④-1 の回答結果(有効回答数:15)

質問④-1	回答数
1. 同学年間で、探究学習の目的・意義の共有が十分でない。	6
2. 他学年間で、探究学習の目的・意義の共有が十分でない。	7
3. 同学年間で、カリキュラムの共有が十分でない。	1
4. 他学年間との、カリキュラムの共有が十分でない。	3
5. 指導方法について、教員間であまり議論されていない	4
6. 授業の進行状況を共有できていない。	1
7. 教員間で生徒への指導方法や課題点の共有がなされていない。	2
8. 同学年間で授業の振り返りが十分に行われていない。	3
9. 他学年間で授業の振り返りが十分に行われていない。	6
10. 特になし	0
11. その他	5

課題点においては、「1. 同学年間で目的・意義の共有（以下、課題 A）」が 7 票で最も多くの高等学校に選ばれていた。次いで「2. 他学年間で目的・意義の共有（課題 B）」「9. 他学年間で授業の振り返り不十分（課題 C）」（ともに 6 票）となっている。「その他」を挙げた高等学校も 5 校あり、中でも「探究」担当者と担当外のギャップ（意識差）に言及する高等学校が数多くあった。一方で、「同学年間でカリキュラム共有」（1 票）「授業の進行状況共有」（1 票）と授業運営に関わる共有の部分は他の課題に比べると優先順位は低いと言える。

下の表 17 は課題点 A, B, C の原因・理由をまとめたものである。

表 17) 質問④-主な課題点の原因・理由の回答数

	ア. 時間不足	イ. 認知不足	ウ. 人手不足	エ. 連携不足	オ. 期待のなさ	その他
1(課題 A)	5	5	3	1	2	1
2(課題 B)	6	5	3	4	1	1
9(課題 C)	6	2	3	2	1	0

どの課題に対する原因・理由も「時間不足」が最も多く挙げられていた。逆に、「期待のなさ」を原因・理由に選んだ高等学校はどの課題に対しても 2 校以下であり、「探究」に期待していないわけではないことが読み取れる。

▶質問④-2:「総合的な探究の時間」における教員間の課題点のうち、あなたが特に課題だと思う点を表 2 の 1~9 の項目から最大 3 つまでお選びください。次に、その原因・理由に当てはまるものを下記の項目ア~オから全て選択し、右の列にチェックしてください。

表 18) 質問④-2 課題点に対する原因・理由の選択肢

理由：ア [時間不足]

授業準備等で忙しく、議論に十分な時間が割けないから。

イ [認知不足]

探究学習そのものの理解・認知が十分でないから

ウ [人手不足]

教員数が少なく、人手が足りていないから。

エ [連携不足]

探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから

オ [期待のなさ]

探究学習による教育効果に期待していないから。

表 19) 質問④-2 の回答結果(有効回答数:15)

質問④-2	回答数
1. カリキュラム（授業計画）の作成が難しい。	10
2. クラス間で、授業の進行に大きな差がある	2
3. カリキュラム（授業計画）通りに授業が進行していない。	0
4. 教員一人あたりの負担が大きい。	12
5. 生徒の評価基準がはっきりと決まっていない。	10
6. 探究学習が生徒にどのように役立っているかよく分からない。	2
7. 授業を通して明らかになった課題点を改善できていない。	2
8. 特になし	0
9. その他	0

課題点については、「4. 教員の負担の大きさ（課題D）」が12票で最も多くの学校に選ばれていた。次いで、「1. カリキュラム作成の困難（課題E）」、「5. 生徒の評価基準の未確定（課題F）」が10票と続いている。

課題Dの原因・理由としては「時間不足」が9票で最も多く挙げられていた。そのほか課題Eでは「時間不足」が8票、課題Fでは「時間不足」6票、「認知不足」5票、「人手不足」3票と多く選ばれていた。

下の表20は、課題点D,E,Fの原因・理由をまとめたものである。

表 20) 質問④-2 主な課題点の原因・理由の回答数

	ア, 時間不足	イ, 認知不足	ウ, 人手不足	エ, 連携不足	オ, 期待のなさ	その他
4(課題D)	9	4	8	3	1	1
1(課題E)	8	4	4	2	1	2
5(課題F)	6	5	3	1	0	3

どの課題に対する原因・理由も「時間不足」が最も多く挙げられており、「人手不足」、「認知不足」も全ての項目で多く挙げられていた。

一方で④-1同様、「期待のなさ」を理由に選んだ学校はどの課題に対しても2校以下であり、「探究」に期待していないわけではないことが読み取れる。

▶質問④-3：あなたが思う、貴校の「総合的な探究の時間」における生徒への指導上の課題点を表3の1～14の項目から最大3つまでお選びください。次に、その原因・理由に当てはまるものを下記の項目ア～キから全て選択し、右の列にチェックしてください。

表 21) 質問④-3 課題点に対する原因・理由の選択肢

理由：ア [認知不足]

教員間での探究学習そのものの理解・認知が十分でないから。

イ [カリキュラム議論不足]

教員間での探究のカリキュラム作成に関する話し合いが十分でないから。

ウ [指導に関する議論不足]

教員間での生徒への指導に関する話し合いが十分でないから。

エ [人手不足]

教員数が少なく、人手が足りていないから。

オ [連携不足]

探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから。

カ [期待のなさ]

探究学習による教育効果に期待していないから。

キ [生徒の意欲]

授業に対して生徒が前向きでないから。

表 22) 質問④-3 の回答結果(有効回答数:16)

質問④-3	回答数
1. グループの進度に応じた的確な指導ができていない	2
2. グループ内での役割分担がうまく機能していない。	0
3. 授業中、生徒に対して意欲的に指導を行っていない。	1
4. 生徒のやる気をうまく刺激できない。	7
5. “課題の設定” に対する指導が難しい。	9
6. “情報の収集” に対する指導が難しい。	5
7. 情報や意見の “整理・分析” に対する指導が難しい。	7
8. 成果物の “まとめ・表現” に対する指導が難しい。	2
9. Word や PowerPoint などの操作が苦手な生徒への指導が難しい。	2
10. 生徒に対して、探究学習の振り返りを十分に促していない。	4
11. クラス内で生徒の成果物の共有がなされていない。	0
12. 他クラスとの間で生徒の成果物の共有がなされていない。	0
13. 特になし	0
14. その他	0

課題点については「5. “課題の設定” に対する指導が難しい。(課題 G)」が9票で最も多くの高等学校に選ばれていた。次いで、「7. 情報や意見の “整理・分析” に対する指導が難しい。(課題 H)」 「4. 生徒のやる気を上手く刺激できない(課題 I)」が7票獲得している。

次に、それぞれの原因・理由に目を向けると、課題 G、H では、「認知不足」「カリキュラム議論不足」「指導に関する議論不足」「人手不足」がまんべんなく選ばれており、また課題 G については「その他」に 4 票が入っていることから、課題の原因・理由は多岐にわたっていると言える。課題 I では「指導に対する議論不足」が 6 票で最多であった。

下の表 23 は、課題点 G、H、I の原因・理由をまとめたものである。

表 23) 質問④-3 主な課題点の原因・理由の回答数

	ア. 認知不足	イ. カリ キュラム 議論不足	ウ. 指導 に関する 議論不足	エ. 人手不足	オ. 連携不足	カ. 期待 のなさ	キ. 生徒 の意欲	ク. その他
課題 G	3	3	3	1	1	1	2	4
課題 H	3	2	2	2	0	0	0	1
課題 I	4	4	6	2	1	1	1	0

また、どの課題に対しても「期待のなさ」は 1 票以下で、④-1、④-2 同様、「探究」に期待していないわけではないことが読み取れる。

▶質問④-4:「総合的な探究の時間」に関する以下の項目のうち、あなたが、課題点だと思うものを全てチェックしてください。

表 24) 質問④-4 の回答結果(有効回答数:16)

質問④-4	回答数
1. 中学校での「総合的な学習の時間」が活かされていない。	5
2. 教育委員会からの正確な情報共有が十分でない。	3
3. 探究学習（目的やカリキュラムなど）について保護者への説明が十分に行われていない。	3
4. 生徒の成果物の発表が地域の方々や保護者に共有されていない。	5
5. 大阪府内の学校間で探究学習の充実度に差があると感じる。	11
6. 大阪府内の学校間で、探究学習の課題点や指導方法などの共有がない。	10
7. コンピューターが十分に利用できる設備・環境がない。	8
8. 特になし	0
9. その他	0

課題点については、「大阪府内の学校間で、探究学習の充実度に差があると感じる」が最多の 11 票であり、次いで「大阪府内の学校間で、探究学習の課題点や指導方法の共有がない」が 10 票であった。このことから、学校間での探究学習に関する情報共有を課題と感じている学校が多いと読み取れる。また、「コンピューターが十分に利用できる設備・環境がない」は 8 票であり、コンピューター設備面に課題を感じる学校も多くみられる。

また、＜「総合的な探究の時間」の課題に対する調査＞の質問④-1 と④-2 のアンケート結果から、学校で実施されている探究学習の目的・意義の共有が不十分である学校は探究学習のカリキュラム作成と生徒の評価が不十分であるという傾向が見られた。

以下に具体的な分析結果を記す。

- 質問④-1で課題点として「同学年間での目的・意義の共有が十分でない」または「他学年間での目的・意義の共有が十分でない」を回答した高等学校の集合を集合A(7校)とする。
- 質問④-2で課題点として「カリキュラム作成が難しい」を回答した高等学校の集合を集合B(5校)とする。
- 質問④-2で課題点として「生徒の評価基準がはっきりと決まっていない」を回答した高等学校の集合を集合C(5校)とする。

これらの集合A, B, Cを分析した結果、AかつBに当てはまる高等学校は5校、同様に、AかつCに当てはまる高等学校も5校であった。集合Aであれば集合B、Cに属するという傾向が見られ、学校で実施されている探究学習の目的・意義の共有が不十分である学校は探究学習のカリキュラム作成と生徒の評価が不十分であるという傾向が見られた。

<④の考察>

質問④-1より、学年に関わらず「目的・意義の共有」という「探究」の根本に関わる部分で現場が抱える大きな問題だと言える。また、他学年間での授業に関する共有ができていないことから、学校全体で「探究」に関する体系的な枠組みが作られておらず、三年間を通して身につけて欲しい力に関する議論や、年度を跨いだ探究活動の引き継ぎが十分に機能していないと考察できる。

質問④-2からは、教員の負担の大きさが何よりの問題であるといえる。これは「人手不足」が原因・理由として多く挙がっていたことから明らかだろう。また授業のマニュアル化（「カリキュラム作成の困難」、「評価基準の未確定」）が不十分であり、探究活動の多様さという特性上の難しさ（※2）が原因・理由で多く選ばれた「時間不足」や「認知不足」に繋がっているとも言える。

質問④-3では、「探究」のプロセス（課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現）（※3）のうち、学校現場は特に「課題の設定」と「整理・分析」のステップへの指導に対して問題を抱えていると推察でき、得票数最多3項目の内2項目（課題D、E）が「探究」のプロセスに関する課題であった。

質問④-4より、探究学習に対する大まかな取り組みの充実度の差は学校間でも認知されているが、その具体的な取り組みについては学校間で十分共有されていないといえる。つまり、充実度の高い学校からの効果的な指導法の共有や、充実度の低い学校からの課題点の共有が行われていないのではないかと推測される。

最後に質問④-1, 2より、目的の共有が不十分であれば、探究学習の内容に関わるカリキュラム作成と生徒の評価が不十分になると考えた。よって、探究学習において、その目的・意義の共有はその探究学習の充実度にとってきわめて重要であるといえるのではないかと考察した。

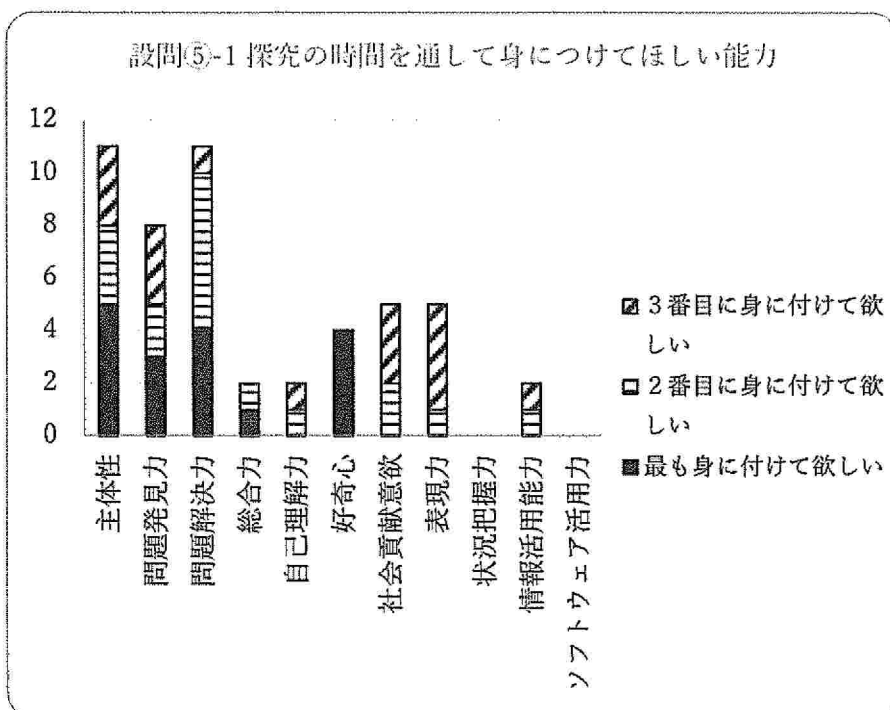
<⑤「探究」を通じて生徒に身につけて欲しい技能・能力に関する調査>

質問⑤-1.2で選択肢にあげた技能・能力は、池田・村瀬・武田（2020、神田外国語大学）の質問紙調査の調査項目（※4）や、五浦・椿（2018、北海道情報大学）の研究（※5）経済産業省が提唱する「社会人基礎力」（※6）を参考にして作成した。

▶質問⑤-1: この質問では、「総合的な探究の時間」の授業を通して高校生に身につけて欲しい個人的な技能・能力について伺います。1～11 の技能・能力について、あなたが高校生に最も身につけて欲しいと考えるものを、1 位から 3 位まで選び、次ページの記入欄に番号でお答えください。

項目間の比較については、「最も身につけて欲しい」と回答された項目を得票数×3pt、同様に「2番目に身につけて欲しい」×2pt、「3番目に身につけて欲しい」×1ptとして得点換算を行った。得点はグラフの右に記載した表に示した通りである。

表 25.26)質問⑤-1 の回答結果(左)と得点結果(右)



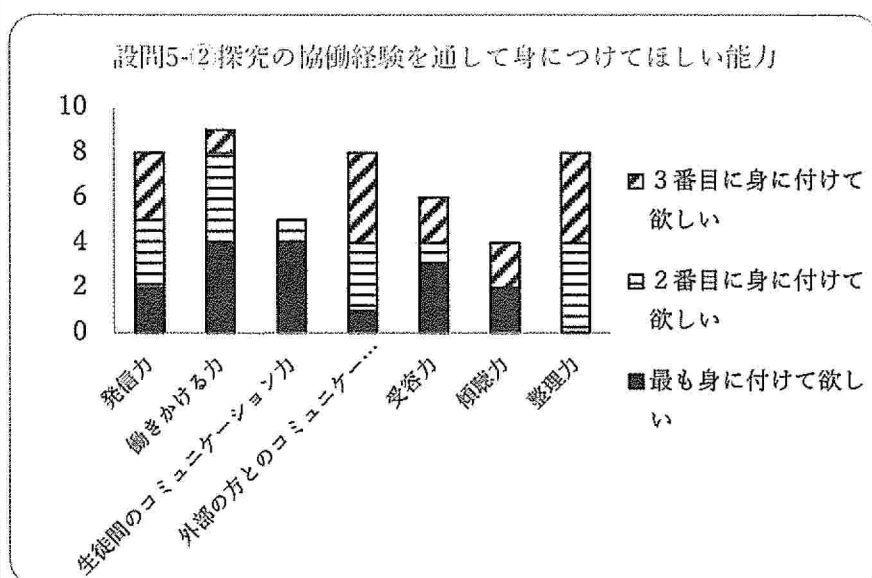
項目	得点
主体性	24
問題発見力	16
問題解決力	25
総合力	5
自己理解力	3
好奇心	12
社会貢献意欲	7
表現力	6
状況把握力	0
情報活用能力	3
ソフトウェア活用能力	0

「問題解決力」が最も得点が高く (25pt)、次いで「主体性」(24pt)、「問題発見力」(16pt)となった。この3項目は回答数で突出していた。

これらはアンケート用紙において、それぞれ自ら考え行動する、疑問を解決する、または問題を発見する力と定義しており、生徒自身が能動的に考え、それを実行する力が求められていると考えられる。一方で「情報活用能力」(3pt)や「ソフトウェア活用能力」(0pt)といった技能的な側面は、探究活動を通して身につけてほしい能力としては優先順位が低いという結果となった。

▶質問⑤-2: この質問では、「総合的な探究の時間」の授業中の協働経験を通して高校生に身につけて欲しい技能・能力についてお聞きします。下記の 1～7 の技能・能力について、あなたが高校生に最も身につけて欲しいと考えるものを 1 位から 3 位まで選び、下の記入欄に番号でお答えください

表 27.28) 質問⑤-2 の回答結果(左)と得点結果(右)



項目	得点
発信力	15
働きかける力	21
生徒間のコミュニケーション力	14
外部の方とのコミュニケーション力	13
受容力	13
傾聴力	8
整理力	12

とびぬけて重視されているという結果がでたのは、「働きかける力」

(21pt)である。この力は、「周囲に対して積極的に働きかけ、必要に応じて人を巻き込みながら進める力」とアンケート用紙において定義していた。積極性を持ち、かつ周りとの協働もできる力が求められている。次いで得点が高いのが「発信力」(15pt)、「生徒間のコミュニケーション力」(14pt)であることから、主体的なコミュニケーションが重視されていることがうかがえる。

▶質問⑤-3: 先程の質問 5-1, 2 で選択された技能・能力について伺います。貴校で実施されている「総合的な探究の時間」のプログラムは、それらの技能・能力を習得するためにどのくらい有効だとあなたは思いますか。左列の当てはまる項目にチェックしてください。

表 29) 質問⑤-3 の回答結果(有効回答数:16)

質問⑤-3	回答数
1. 有効である。	5
2. どちらかと言えば有効である。	9
3. どちらとも言えない。	2
4. どちらかと言えば有効でない。	0
5. 有効でない。	0

14人が、実施している「探究」のプログラムについて、高校生に身につけてほしい技能・能力の習得に「有効である」「どちらかと言えば有効である」と回答しており、教員の狙いに沿ったカリキュラムを組むことができていることが伺える。

<⑤の考察>

⑤-1、⑤-2の結果から、高校教員は生徒に対して、能動的に活動に取り組む力を求めていることが分かる。大学生が関わる際には何か課題に直面した生徒に対して答えを教えるのではなく、問題解決に至るまでのヒントを出す、メンターとして相談にのり生徒の考えの言語化を自然に促すなどして、あくまで主体的に動くように促すことが必要とされる。

また、大学生が関わる際には、生徒が活発に発言したり行動したりする雰囲気を整えるべきである。具体的には、生徒の発言や行動を肯定的に評価する、緊張しているグループや行き詰っているグループに声をかけて生徒の発言・行動を促す、発言の少ない生徒に話題を振る、などが考えられる。生徒のグループワークや探究活動の場に直接関わるもののほかに、問題発見力、好奇心をのばす働きかけとして、大学生が実際に大学で学んでいることや興味を抱いていることを紹介し、興味の幅を広げてもらうようなワークショップの開催などが挙げられる。

⑤-3の結果より、教員の狙いに沿ったカリキュラムを組むことができていることが伺える。したがって質問④にあげられた「探究」の課題点をどのように解決していくかが、より充実した「探究」の構築に重要であると考えられる。

6. 大学生の効果的な関わり方と留意点

以上の研究結果より、大学生が関わる上で効果的と思われる3つの関わり方と、実際に連携していく上で大学生が留意すべき項目を提示する。

<大学生の効果的な関わり方>

問③-2より、大学生の効果的な関わり方として以下の六つの形態が挙げられた。

1. ヘルパー
2. アドバイザー
3. TT (Team Teaching)
4. 登壇者
5. 評価者
6. その他

ここで質問②、③より、各回答の調査対象校における現状の外部組織との連携方法と、大学生との効果的な連携の関連性を調べたところ、講義・講演などの知識インプット型の連携を大学生に望んでいる高等学校2校は現在、外部組織とはインプット型の連携を行っておらず、逆に知識インプット型の連携を行っている高校(7校)は、大学生との効果的な関わり方として知識インプット型を記述していない。

これより、現在外部組織と講義・講演を中心とした知識インプット型の連携を行っている高校は、ある程度知識インプット型の連携の、生徒への学習効果を考慮した上で、大学生には知識インプット型の連携は力不足である

北海道内の高等学校を対象に行った、五浦・椿の研究(※7)では、多くの高等学校は大学に短期的な関わりを望んでいたが、今回の研究を通して、調査回答校は長期的な連携に好意的であった。

講演やパネルディスカッションなどを行うといった単発の授業での高大連携へのニーズもあるが、ヘルパーやTT、アドバイザーなどの長期的な高大連携を求めている回答が多く見られた。

これより、以下の3つの関わり方について詳細に考察・検討していく。

- ① アドバイザー
- ② TT (Team Teaching)
- ③ コミュニティ作成者

<①アドバイザー>

・アンケート結果からの考察

問②-2から、従来の探究学習における学校外部との連携内容は講義、講演などインプット型のものが多いことが分かる。これらの連携は、大学や企業の講演者から専門的な知見を得ることが、高校生の探究活動における刺激になるという特徴を持っている。以下では、このようなインプット型とは異なる新たな連携方法として、より高校生に近い立場から探究活動をサポートする、大学生の『アドバイザー』としての連携を提案する。

問③-1から、効果的な大学生の関わり方を尋ねた中で、「アドバイスをいただくことで、生徒たちがよりやる気になる」「高校の教員だけで対応すると、全員に細かいアドバイスをする時間がないが、それを少しでも解決したい。」「テーマ設定、問いの設定、検証のプロセス等、各ポイントにてアドバイスをもらえる体制。」という回答があった。

・アドバイザーの定義

これより、高等学校の教員が大学生に求める役割の形として、高校生が探究活動を行っていく上で、大学において研究活動を行っている立場から、課題設定や論文指導などにおけるアドバイスを行っていく『アドバイザー』という役割を定義した。

・大学生が行うことの有効性

『アドバイザー』という役割は、その特性上、大学生が担うことに大きな意義やメリットがあると考えた。例えば問③-3では、「大学生が高校生との『斜めの関係』を利用して自らの研究やフィールドワークの経験を「探究」で活かすことが連携の上で効果的である」という意見が得られた。大学生は専門性や経験という点で大学教授や企業に劣るが、対象となる高校生との年齢、立場の近さというバックグラウンドを持った上で自らの勉強や研究活動の経験を生かした連携を実施できることが、大学生がアドバイザーとして「探究」に関わる意義だと言える。

また、問④-3で、「探究」における課題点に「課題の設定の指導が難しい」と回答していた教員のうち、その理由として「生徒のやる気を刺激することが難しい」、または「生徒の多様性に対応することが難しい」という意見があったが、このニーズに対しては、上述したとおり、高校生と立場の近い大学生が大学で自らの専攻分野で探究活動に挑戦しているということが生徒のやる気を刺激することにつながるという点で期待できる。加えて、様々な学部 to 所属する大学生が各々の研究領域を活かしたアドバイスを行うことで、教員1人だけでは網羅できない生徒の多様な興味や研究内容に対応できると考える。これにより、探究活動によって生じる教員の負担の軽減にも繋げられるのではないだろうか。

・今後の展望

具体的に探究学習のカリキュラムのどの時期に、どれくらいの期間関わるのがアドバイザーとして最も効果的なのかについては現場の先生方により詳しく意見を求め考察していく必要がある。

<②TT (Team Teaching)>**・アンケート結果からの考察**

「探究」における教員間の課題について調査する質問④-2では、[時間不足]による「教員の負担の大きさ」、[時間不足]と[人手不足]による「カリキュラム作成の困難」、[時間不足]、[認知不足]、[人手不足]による「生徒の評価基準の未確定」が、「探究」における授業面での主な課題であることがわかった。この3つの課題に対するアプローチとして、ティームティーチング (team-teaching) が考えられる。

・TT の定義

ティームティーチング (team-teaching) は、1950 年代後半にアメリカで「指導の個別化」のために行われた、複数の教師の専門的知識を生かした組織編成の下で行われた方法である。ティームティーチングのメリットは「多面的な視点から子ども理解を図れる」「指導方法の弾力化を図れる」「教師の相互の力量向上を促す」ことなどが挙げられ、学校教育が抱えている様々な課題解決のために、多様な形態のティームティーチングが求められている (※8)。

本研究においては特に、教員とともに授業計画の段階から参与する関わり方を示すものとする。大学生が単発あるいは短期的に「探究」の授業に参加するのではなく、カリキュラム作成の段階から中長期的に参加することで、「探究」に対して総合的に関わり、授業に対して様々な可能性を与えることが可能となる。

・大学生が実施する有効性

大学生は高校生と年齢の近い立場から、授業における伴走者のサポートを行うことができる。またカリキュラム作成の段階から携わることで、教員との意思疎通をスムーズに行うことができ、探究活動をより効果的なものにできる。アンケート結果からは、「探究」の授業には専門教員がおらず、誰が担うかが課題になっているという「持ち手」問題を解決する方法として、TT など大学生が関わることを前提とした全体の構想を新たに創造することは可能かと思う、という旨の回答も得られた。

・今後の展望

TT は、ヘルパー、アドバイザーなどと比較しても、長期的かつ高度な関わりが求められる形態である。大学生が TT をする際の課題点は主に 2 つある。

1 つは、教員と同等まではいかずとも、教員に近い高度なレベルでの指導を行う技量と「探究」に対する熱意が求められる点である。そしてもう 1 つは、連携校と長期的な関わりになるために、大学生の勉強、課外活動、アルバイト等との両立の影響により、連携が困難になる可能性がある点である。

さらに、長期的に関わる中で、大学生と教員の連絡や、日程調整等がさらに教員の負担となる可能性もある。

しかし同時に、「探究」の課題点を減らせる可能性と、大学生が TT に関わる有用性があるという点で、大学生に関わる形での TT を実現させる意義はあると考える。課題点を明確にし、対策を検討しながら、実現に向けて動いていきたい。

<③コミュニティ作成者>

・アンケート結果からの考察と新しい関わり方に関する議論

④-4の結果から、学校間での探究活動の充実度に差はあると認識しつつも他の学校が具体的にどのようなカリキュラムや指導方法を用いて探究活動を行っているか、どのような課題点を抱えているのかについての情報共有が十分になされていないことがわかる。この点より、学校間を繋ぐコミュニティを大学生が作成するという議論が導かれる。コミュニティを作成して、「学校間での具体的な課題や指導方法の具体例やカリキュラム・生徒評価の方法を共有すること」が主たる目的である。コミュニティの概要としては、高等学校の教員の方々が集まって、議題（自校での活動の成功例、失敗例）を持ち寄り、それらを分析する形態が挙げられた。

しかし、アンケート結果から読み取れた教師の[時間不足]を考慮に入れると、教員の方々に直接赴いてもらう形式は不適切に思える。さらに、アンケート結果からは大学生がこのようなコミュニティを運営するインセンティブは導けない。

・新しい関わり方の提示

これらの議論を経て、大学生レポートという活動（仮名：探究新聞）を実施する案にたどり着いた。その活動の概要として、大学生の、学校現場の探究活動への参与観察や、教員へのインタビューなどの活動を行い、そこでの知見をレポートとしてまとめ、多くの学校現場に向けて発信するというものである。

・活動の有効性

上述のような活動を通して、「学校間での具体的な課題、指導方法の具体例やカリキュラム・生徒評価の方法が共有されていない」という課題が解決されたと考える。またこの活動により、大学生は多くの学校現場における探究学習の実態を知るきっかけとなり、特に将来教員を希望する大学生にとっては大きなインセンティブがあると考えられる。

・今後の展望

この活動の有効性を評価する方法やレポートの発信方法、学校との交渉方法について対策を検討する必要がある。評価方法に関しては、レポート内容だけでなく、受け入れに際する学校側のコストについても教員からフィードバックをもらうことが挙げられた。レポートの発信時には、生徒のプライバシー保護を徹底する必要がある、学校との交渉を行う際には先生方の負担にならないように対策を講じる必要があろう。

<関わる上での懸念点>

質問③「『総合的な探究の時間』における、大学生との連携への期待度に関する調査」において、高校教員が懸念点として挙げた意見を5つに分類した。

1. 大学生のモラル
2. 大学生のキャパシティ
3. 大学生のクオリティ
4. 大学生との調整コスト
5. 金銭的成本

「1. 大学生のモラル」を懸念する理由としては、教員と大学生の信頼関係が構築されていない点や、大学生が生徒に不適切な指導を行うことがあり得るという点、また、高校生が大学生とトラブルになった経験（やその伝聞）から、そもそも大学生という属性が信用されていないのではないかと考えられる。

そのような懸念点への対策として、連携の際のルールを明文化し先生と共有することや、連携する大学生への徹底したモラル講習が挙げられる。

「2. 大学生のキャパシティ」を懸念する理由には、学生として授業やアルバイト、課外活動がある中で、大学生がどれくらい授業運営/補助に時間や人員を割くことができるのかが不明瞭である点が挙げられる。大学生との連携を継続的に行うために大学生のキャパシティは重要な要素であり、その点から懸念が大きいと考えられる。

対策としては、中長期的な関わりの際に、事前にシフト表を提出することで、大学生のキャパシティを提示できると考える。しかしながら、大学生が活動に参加できる時間は大学の時間割に大きく依存するため、連携に関わる大学生の人数や活動時間が変動的となることは避けられないだろう。

「3. 大学生のクオリティ」を懸念する理由としては、大学生の指導技術に個人差があることが考えられる。また、大学生との信頼関係が構築できていない点や、大学生との連携実績がないことも、懸念を生じさせているのではないだろうか。

「4. 大学生との調整コスト」とは、メールによる定期的な連絡や日程調整が多忙な先生にとって負担となる点や、そもそも大学生のできることが分からず、授業内での大学生の立場/役割の共通認識をすり合わせる際の負担が大きいことを指す。

「5. 金銭的成本」を懸念点として考える理由としては、「探究」に割くことのできる予算が少ないのに対して、大学生と持続的に連携するためには大学生に対する金銭的報酬が必要だと先生方が考えていることが背景にあると考えられる。

これら5つの懸念点を踏まえ、調査結果より、望ましいと考える大学生との関わり方を実現していくにあたり、「1. 大学生のモラル」と「3. 大学生のクオリティ」という2つの懸念点を優先すべきだと考え、対策していくこととした。

まず、「大学生のモラル」については、ルールを明文化し先生と共有することを対策とする。それにより、大学生と先生の間でどこまでが有責性があるのかについての共通認識を持つことができる。その上で、大学生が想定されるトラブルをケーススタディ形式で事前に学習しておくことにより、トラブルを未然に防ぐ対策をとることも必要であると考えられる。

次に「大学生のクオリティ」については、実際に連携していく上でフィードバック体制を体系化することを対策とする。具体的には、長期的連携として期待される TT において、助走期間として生徒と先生から大学生の振る舞いに対してフィードバックを行ってもらい、それを改善する時間を大学生側で設けるといった工夫や、大学生同士で指導方法を相互にフィードバックするといった工夫が挙げられる。

また上記以外に、大学側に協力を求めることでこれらの懸念点を解消するという案についても検討した。例えば「1. 大学生のモラル」に関しては、探究学習サポートを行う学生向けに研修を行うことが、対策として考えられる。大学として行う、学校現場への実習前に学生に指導を行っている教職課程の教員に、その研修を依頼できるのではないかと。「2. 大学生のキャパシティ」に関しては、教職課程の授業で宣伝を行うことで人員を確保し、人数の面で余裕のあるサポート体制を構築することができると考える。「3. 大学生のクオリティ」に関しては、教職課程の授業で探究学習を扱う教員、もしくは探究学習を専門的に研究されている教授に、大学生向けの勉強会を依頼することが考えられる。それにより、大学生の探究学習に関する知識を向上させることができると考える。

このように、大学生間、大学生-学校現場間で懸念点を解消することに加え、大学と協同することで、より良い探究学習サポートが実現できるのではないだろうか。

<追記>

12月末から1月初旬に3名の高校教員(A, B, C)を対象に、本研究の研究結果の「大学生の効果的な関わり方・留意点」に対する意見の聞き取り調査を行った。

聞き取り調査で聞いた意見は以下の通りである。

【大学生の効果的な関わりかたについて】

- TTについて、教員とカリキュラム作成に携わることは事前の打ち合わせを行う必要があり、実際に可能かどうかは非常に疑問である(A)
- どのように大学生と協働するのが効果的なのが分かるには試行錯誤が必要であり、できることから始めて徐々に連携の回数や期間を増やしていくべき。(A)
- カリキュラムは学校教育目標にそって教員が主体となって作っていくものであり、カリキュラムを大学生と作成すると、授業内容が学校教育目標からずれてしまうのではないかと。(B)
- アドバイザーとして大学生が関わる強みは、教員の負担軽減以上に教員だけでは対応できない学際性の広さをカバーできることだと思う。(B)
- アドバイザーで大学生が関わる場合、短期的な関わりでも構わない(C)
- 大学生がアドバイザーとして自らの研究領域を活かしたアドバイスを行うことで、教員の負担が軽減されるとともに、教員の指導の幅を広げることにつながるのではないかと。(A)
- 教員の負担軽減より、探究の充実を目的の主眼として活動すべき(C)
- 大学生にもメリットのある活動でなければならない(C)

【関わる上での懸念点】

- 大学生のクオリティ/モラルを向上させるには、定期的に教育の専門家や中高の先生を招いて研修を重ねる必要がある。(A)
- 5つの懸念点(留意点)の他に、「継続性」も懸念している。大学生や先生方が年々変わっていく中で、システムとして連携を続けられるのか。(B)

聞き取り調査を十分に実施できていないため、今後より多くの高校教員に行う必要があるが、TTについては2名の高校教員はあまり肯定的ではなかった。理由としては、カリキュラム作成段階から大学生が関わる事が大学生/高等学校とも可能なのかといった点や、高等学校ごとに設定されている学校教育目標にそって作成されるカリキュラムを、学校の内情に詳しくない大学生と一緒に作成する際に、意識の共有が難しくなるといった点が挙げられた。一方、大学生との協働が教員への負担になるというデメリットに対して理解を示した上で、大学生との連携による「探究」の充実というメリットに期待する意見も聞かれた。

アドバイザーに関しては、教員の負担が減ること以上に、複数の大学生がアドバイザーとして関わることで、生徒の興味関心の幅広さをカバーしうだけの学際性を提供できることに対して好意的な意見が聞かれた。加えて、連携が、高校教員の指導の幅を広げることにも繋がるという意見が聞かれた。

聞き取り調査の結果より導きだされた懸念点への対応策として、以下を提示する。

- 大学生のクオリティ/モラルの向上のために、定期的に教育の専門家や中高の先生を招いて研修を行うこと
- 教員の異動や大学生の代替わりなどにも対応できるように、大学生が継続的に関わるシステムを体系化すること

7. まとめ・今後の展望

本研究は複数年での実施を計画している。今年の研究においては、大学生の効果的な「探究」への関わり方と関わる上での留意点に関する考察を深めることができた点において意義のある研究であったといえよう。

今回の調査での反省点として、以下の点が挙げられる。

- 母数が少ない調査であったため、得られた意見を、一般化することが難しい点。
- 調査に参加した高校教員が、「探究」に意欲的である可能性が高く、本研究のデータが一般的な教員の意見を反映できている訳ではない点。
- 探究未実施校への調査が不十分であった点。
- 大学生との具体的な連携方法に関して、アンケートによる調査が不十分であった点。

また、今回の調査結果より導き出された大学生の望ましい関わり方が、本当に高等学校の教育現場から求められているのかについて、高校教員への聞き取り調査を継続的に行う必要がある。

来年度以降の研究では、今年度の研究内容をより多くの高等学校を対象に行い、データの信頼性を高めると同時に、今年度の研究より導かれた大学生の効果的な関わり方を参考に高等学校での実証研究を行う中で、それぞれの関わり方における課題点や意義について考察を深めていきたい。実際に本研究を行う中で、複数の高等学校から連携活動に関する問い合わせがあり、来年度に大阪府内の高等学校1校と長期的な連携を実施予定である。今回の研究で得られた知見を参考に、大学生が「探究」に関わる意義や効果的な方法、懸念点をより明確化していきたい。

8. 参考文献

※1) 文部科学省,【総合的な探究の時間編】高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説,2018
(https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf 2020年12月12日最終確認)

※2) 村上忠幸,「『深い学び』を実現するための探究学習とは」,京都教育大学,京都教育大学教育実践研究紀要,第18号,2018,

※3) 文部科学省,【総合的な探究の時間編】高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説,2018,p12 (https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf 2020年12月12日最終確認)

※4) 池田政宣、村瀬公胤、武田明典,「『総合的な探究の時間』の導入に向けた 高等学校教員のニーズ調査」, 神田外語大学, 神田外語大学紀要,2020, p459
(https://kuis.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1715&item_no=1&page_id=13&block_id=17 2021年1月5日最終確認)

※5) 椿達、五浦哲也「『総合的な探究の時間』における高大連携プログラムの開発(Ⅱ)―高等学校における教育現場の実態調査から―」,2018,北海道情報大学,大学紀要第30巻 (https://www.dohohodai.ac.jp/kiyou/pdf/30_1/Tsuura_Tubaki.pdf 2021年1月6日最終確認),p7-9

※6) 経済産業省産業人材政策室,「人生100年時代の社会人基礎力について」,2018
(https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf 2021年1月5日最終確認)

※7)
椿達、五浦哲也「『総合的な探究の時間』における高大連携プログラムの開発(Ⅲ)―プログラムの内容を導くための調査分析―」,2019,北海道情報大学,大学紀要第31巻 (https://www.dohohodai.ac.jp/kiyou/pdf/31_1/Tsubaki_Itsuura.pdf 2021年1月6日日最終確認)

※8)
日本教育工学会 「教育工学事典」2000,実教出版,p380-381

令和2年10月

「総合的な探究の時間」担当者様

代表：大阪大学人間科学部2年 藤井拓海
共同研究学生6名

大学生による「総合的な探究の時間」への効果的な関わり方の研究

アンケート協力をお願い

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

私は、大阪大学人間科学部2年 藤井拓海と申します。

私たちは大阪大学「学部学生による自主研究奨励事業」にて、大学生による「総合的な探究の時間」（以下、「探究」）への効果的な関わり方をテーマに、主に「探究」担当者の方を対象とした調査を行っております。

私たちは大阪大学教職課程履修生有志で、高大連携教育団体『SUIT（すいっと）』を結成し、高校生と大学生が関わる高大連携の実現を目指し活動しております。

本研究の着想及び弊団体結成の目的は、

- ① 大学生が関わることにより、「探究」を、高校生にとってさらに効果的に学べるものとする。
- ② 「探究」の準備、実施にかかる学校現場の負担を軽減すること

の2つです。

私たちは結成以降、「探究」の時間を中心に大阪府内2校、京都府内1校にて大学生による授業を行なわせていただきました。大学生が自らの大学生活や大学での学びについて語り、高校生に自らの進路について考えてもらう機会の提供や、「探究」にて高校生の伴走支援などを実施しております。結成から1年足らずの未熟な団体ではありますが、より良い活動のために日々精進しております。

これまでの活動で、大学生による協力は、先生方や高校生の皆様からニーズがあるのではないかと実感しております。しかしながら、客観的な数値として「探究」の現状と、「探究」における高大連携の可能性を検証するには至っておりません。そのため、「探究」に関する客観的なデータと、大学生が関わる高大連携の理想形を探るため、本研究を行うことといた

しました。

私たちは、高校の探究学習の発展に寄与したいという思いで活動しております。

また、本研究は、大学生ができる「探究」への最適な関わり方を提示することを最終目標として、長期的に実施する予定です。今年度の研究結果をもとに、来年度以降、より深く検証を重ねていく予定です。

以下に研究趣旨を記載しております。

記

1. 件名：大学生による「探究」への効果的な関わり方の研究
—大阪府北部の高等学校における実態調査から考える—
2. 研究期間：令和2年度10月～12月
3. 研究対象：主に大阪府北部（豊能地区・三島地区・北河内地区・中河内地区・大阪市）の高等学校に勤務されている教員の方々
主に「探究」担当者（各学校で「探究」のカリキュラムや運営に関わっておられる/おられた方）
4. 研究目的：高等学校における「探究」の実情や「探究」のなかで大学生へのニーズを探り、研究結果をもとに高等学校の「探究」で大学生が関わることでできるプログラムを実施すること
5. 研究内容：・勤務校での「探究」の実施状況
・高校教員が、「探究」を通して高校生に得て欲しいと考えておられるもの
・高校における、大学生と協力して「探究」の授業を設計することに対する意識
・どのように大学生が、「探究」の授業に関わることが望ましいと思われるか
・高校教員が大学生にしてほしいことや期待すること
など
6. 研究意義：・高等学校における「探究」の現状を把握できる
・大学生の「探究」への協力が、「探究」の充実につながるかの考察に繋がる

以上

つきましては上記の研究の趣旨をご理解のうえ、ご協力いただける「探究」担当者の方は、同封しております調査票にご回答くださいますようお願い申し上げます。
調査票は全15ページからなり、回答には約5～15分を必要とします。

また、下記の QR コードからでも回答が可能です。お手持ちの携帯電話・スマートフォンから回答いただけます。



質問紙または携帯電話・スマートフォンのどちらかでのみ
回答をお願いします。

回答いただいた質問紙は、同封しております封筒にお入れいただき、送付ください。

お忙しい中大変恐縮ではございますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

○研究協力に対する配慮

1. お忙しい中でのお願いであることを承知しております。
本調査へのご協力及び、調査票へのご回答や返信は任意のものです。
2. 本調査で得られた個人情報及びデータは、漏洩を防ぐために質問紙は段ボールまたはファイルに入れ、大阪大学人間科学研究科内の鍵付棚に保管し、施錠を行います。オンラインアンケートによって得られたデータは、パスワードを付けて USB メモリに保管し、同様に保管いたします。
3. 研究で得られたデータは、研究の目的のみに使用致します。
4. 調査結果は報告書等で公表しますが、その場合も学校や個人が特定されるような情報は公表致しません。

○インタビュー調査について

本調査票は匿名でご回答いただきますが、さらにインタビュー調査にご協力いただける方は氏名・連絡先のご記入をよろしくお願いいたします。ご記入いただいた方には、今後インタビュー調査のご案内を行う可能性があります。

インタビューでは、

- ・高校の教育現場が、大学生と協力して「探究」の授業を設計することへの意識
 - ・どのように大学生が、「探究」の授業に関わることが望ましいと思われるか
 - ・高校教員が、高校教育において大学生にしてほしいことや期待すること
- などをお伺いする予定です。

新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点より、zoom や電話によるインタビューを予定しております。（＊対面でのインタビューも可能です。）

調査票への回答及び提出によって、本調査にご協力いただいたものとさせていただきます。

その他、ご不明な点がございましたら、下記のメールアドレスにご連絡ください。

大阪大学人間科学部

2 年生 藤井拓海

連絡先：（電話）080-6130-9668 （メール）takumifj0720@gmail.com

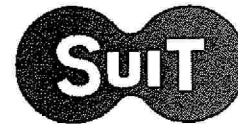
高大連携教育団体 SUIIT はこれまで大学生活や大学での学びを体験するワークショップや「総合的な探究の時間」における高校生の伴走支援などを実施しております。

高等学校の「探究」等での大学生が関わるプログラム実施についてご意見、ご要望、ご質問等ございましたら、下記のメールアドレスにご連絡ください。

高大連携教育団体 SUIIT（すいっと）

担当：藤井拓海（大阪大学人間科学部 2 年）

連絡先：suit.edu.info@gmail.com



敬具

令和2年10月

「総合的な探究の時間」に関するアンケート

お忙しい中失礼致します。大阪大学人間科学部2年の藤井拓海と申します。

私たちは大阪大学「学部学生による自主研究奨励事業」にて、大学生による「総合的な探究の時間」（以下、「探究」）への効果的な関わり方をテーマに、主に「探究」担当者の方を対象とした調査を行っております。

私たちは大阪大学教職課程履修生有志で、高大連携教育団体「SUIT（すいっと）」を結成し、大学生と高校の連携による「探究」の充実を目標として、大阪府・京都府内の数校にて活動しております。

私たちは活動の中で、大学生による協力は先生方や高校生の皆様からニーズがあるのではないかとこの可能性を実感しております。しかしながら、客観的な数値として「探究」の現状と、「探究」における高大連携の可能性を知るには至っておりません。

そのため、「探究」に関する客観的なデータと、大学生が関わる高大連携の理想形を探るため、本研究を行うことといたしました。

本アンケートでは、

貴校の「探究」担当者の方に対して、

- ・「探究」の実施状況
- ・「探究」における外部との連携状況
- ・「探究」における大学生との連携への期待度
- ・「探究」における課題
- ・「探究」を通じた生徒の理想状態

などに関する質問を用意しております。

つきましては、研究の趣旨をご理解のうえ、アンケートへの回答にご協力くださいますようお願い申し上げます。

本アンケートは15ページからなり、回答には5～15分ほど要します。



本アンケートは携帯・スマートフォンから回答が可能です。

尚、本アンケートは
アンケート用紙または携帯・スマートフォンの
どちらかでのみご回答をお願いします。

携帯・スマートフォンでご回答くださる場合、
左のQRコードを読み取っていただき、ご回答ください。

○研究協力に対する配慮

- ・お忙しい中でのお願いであることを承知しております。
- ・調査へのご協力及び、調査票へのご回答や返信は任意によるものです。
- ・本調査で得られた個人情報及びデータは、パスワードを付けて USB メモリに保管し、大阪大学人間科学研究科内の鍵付き棚にて保管いたします。
- ・研究で得られたデータは、研究の目的のみに使用致します。
- ・調査結果は報告書等で公表されることがありますが、その場合も個人が特定される情報は公表致しません。

その他、ご不明な点がございましたら、下記のメールアドレスにご連絡ください。

大阪大学人間科学部 2 年 藤井拓海

連絡先：（電話）080-6130-9668 （メール）takumifj0720@gmail.com

①「総合的な探究の時間」の実施状況に関する調査

貴校における「総合的な探究の時間」の“実施状況”について伺います。
以下の質問に対して、当てはまるものを選び、チェックマークを入れてください。

▷質問①-1：現在、貴校で「総合的な探究の時間」は実施されていますか。

<input type="checkbox"/>	1. 全学年で実施されている。
<input type="checkbox"/>	2. 1年生でのみ実施されている。
<input type="checkbox"/>	3. 2年生・1年生でのみ実施されている。
<input type="checkbox"/>	4. 一部コースでのみ実施されている。
<input type="checkbox"/>	5. まだ実施されていない。
<input type="checkbox"/>	6. 2020年度に実施予定だったが、新型コロナウイルスの影響で実施を見合わせた。
<input type="checkbox"/>	7. その他（ ）

5.6 を選択された方は 12 ページの質問⑤からお答えください。

1~4 を選択された方は以下の質問へお進みください。

▷質問①-2：現在、貴校における「総合的な探究の時間」の授業内容は、「総合的な学習の時間」に比べて、“探究学習”を重視した内容になっているとあなたは思いますか。

<input type="checkbox"/>	1. なっていると思う。
<input type="checkbox"/>	2. どちらかと言えば、なっていると思う。
<input type="checkbox"/>	3. どちらとも言えない。
<input type="checkbox"/>	4. どちらかと言えば、なっていないと思う。
<input type="checkbox"/>	5. なっていないと思う。

②「総合的な探究の時間」における外部との連携状況に関する調査

貴校の「総合的な探究の時間」における「外部組織との連携状況」について、以下の質問に対して、当てはまるものを選び、左列の空欄にチェックマークを入れてください。

（＊外部組織：大学・自治体・企業・NPO 法人・中学校 など）

- ▷質問②-1：貴校の「総合的な探究の時間」において、
外部組織と連携した取り組み・授業展開を行なったことがありますか。
また、現在行なっていますか。

	1. はい。（質問②-2,3 にお答えください。）
	2. いいえ。（質問②-4,5 にお答えください。）

~~~~~  
~~~~~  
<質問②-1で「1.はい」を選んだ方は質問②-2,3 に回答してください>

- ▷質問②-2：その外部組織とは次のうちどれに該当しますか。（複数回答可）

	1. 大学
	2. 自治体
	3. 企業
	4. NPO 法人
	5. 中学校
	6. その他（ ）

- ▷質問②-3：その外部組織とは、具体的にどのような連携を行なっていましたか。
また、行なっていますか。

（自由記述欄）


~~~~~  
~~~~~  
<質問②-1で「2.いいえ」を選んだ方は質問②-4,5に回答してください>

▷質問②-4：今後、貴校での「総合的な探究の時間」において、外部組織との連携を検討していますか。検討している場合、連携内容について簡潔に記述してください。

	1. 検討している。 (検討している連携内容)
	2. 検討していない。
	3. どちらとも言えない・わからない

▷質問②-5：外部組織との連携を計画する場合、生じるとされる問題がありますか？
(複数回答可)

	1. 外部との連携に十分な予算を割くことができない。
	2. 外部組織との繋がり方が分からない。
	3. 連携を企画する時間がない。
	4. 連携をしようとする教員がいない。
	5. 周りの教員の理解を得られない。
	6. 特になし
	7. その他 ()

③「総合的な探究の時間」における、大学生との連携への 期待度に関する調査

以下の質問に対して、当てはまるものを選び、左列の空欄にチェックマークを入れてください。

▷質問③-1：あなたは、「総合的な探究の時間」における、
大学生との連携にどのくらい期待しますか？

	1. 期待している。
	2. どちらかと言えば、期待している。
	3. どちらとも言えない。
	4. どちらかと言えば、期待していない。
	5. 期待していない。

▷質問③-2：どのような点において、大学生との連携は効果的だとあなたは考えますか？
また、どのような形態で大学生と連携することが効果的だとあなたは考えますか？

(自由記述欄)

▷質問③-3：大学生との連携に関して、あなたが懸念されている点がありますか？
ない場合、「特になし」とお書きください。

(自由記述欄)

④「総合的な探究の時間」の課題に関する調査

貴校が抱える、「総合的な探究の時間」における教員間・生徒への指導上の課題点と、その原因・理由について伺います。

以下の質問に対して、当てはまるものを選び、左列の空欄にチェックマークを入れてください。

なお、課題点に関しては今年のカリキュラムを通して感じたものを選んでください。

・「総合的な探究の時間」における教員間の課題点とその原因・理由に関する調査

▷質問④-1：「総合的な探究の時間」における教員間の課題点のうち、あなたが特に課題だと思う点を表1の1～11の項目から**最大3つまで**お選びください。

(左列の空欄にチェックをお願いします)

次に、その原因・理由に当てはまるものを下記の項目ア～オから**全て**選択し、右の列にチェックしてください。

理由：ア [時間不足]
授業準備等で忙しく、議論に十分な時間が割けないから。
イ [認知不足]
探究学習そのものの理解・認知が十分でないから
ウ [人手不足]
教員数が少なく、人手が足りていないから。
エ [連携不足]
探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから
オ [期待のなさ]
探究学習による教育効果に期待していないから。

表1	課題点	原因・理由
	1. 同学年間で、探究学習の目的・意義の共有が十分でない。	<input type="checkbox"/> ア[時間不足]・ <input type="checkbox"/> イ[認知不足]・ <input type="checkbox"/> ウ[人手不足]・ <input type="checkbox"/> エ[連携不足]・ <input type="checkbox"/> オ[期待のなさ]・ <input type="checkbox"/> その他 ()
	2. 他学年間で、探究学習の目的・意義の共有が十分でない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	3. 同学年間で、カリキュラムの共有が十分でない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	4. 他学年間との、カリキュラムの共有が十分でない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()

表 2	課題点	原因・理由
	1. カリキュラム（授業計画）の作成が難しい。	<input type="checkbox"/> ア[時間不足]・ <input type="checkbox"/> イ[認知不足]・ <input type="checkbox"/> ウ[人手不足]・ <input type="checkbox"/> エ[連携不足]・ <input type="checkbox"/> オ[期待のなさ] <input type="checkbox"/> その他 ()
	2. クラス間で、授業の進行に大きな差がある。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	3. カリキュラム（授業計画）通りに授業が進行していない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	4. 教員一人あたりの負担が大きい。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	5. 生徒の評価基準がはっきりと決まっていない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	6. 探究学習が生徒にどのように役立っているかよく分からない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	7. 授業を通して明らかになった課題点を改善できていない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()
	8. 特になし	
	9. その他 ()	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> その他 ()

- ・「総合的な探究の時間」における生徒への指導上の課題点とその原因・理由に関する調査
 ▷質問④-3：あなたが思う、貴校の「総合的な探究の時間」における生徒への指導上の課題点を
 表3の1～14の項目から**最大3つまで**お選びください。
 （左列の空欄にチェックをお願いします）
 次に、その原因・理由に当てはまるものを下記の項目ア～キから**全て**選択し、
 右の列にチェックしてください。

理由：ア[認知不足]

教員間での探究学習そのものの理解・認知が十分でないから。

イ[カリキュラム議論不足]

教員間での探究のカリキュラム作成に関する話し合いが十分でないから。

ウ[指導に関する議論不足]

教員間での生徒への指導に関する話し合いが十分でないから。

エ[人手不足]

教員数が少なく、人手が足りていないから。

オ[連携不足]

探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから。

カ[期待のなさ]

探究学習による教育効果に期待していないから。

キ[生徒の意欲]

授業に対して生徒が前向きでないから。

表 3	課題点	原因・理由
	1. グループの進度に応じた的確な指導ができていない	<input type="checkbox"/> ア[認知不足] <input type="checkbox"/> イ[カリキュラム議論不足] <input type="checkbox"/> ウ[指導に関する議論不足] <input type="checkbox"/> エ[人手不足] <input type="checkbox"/> オ[連携不足] <input type="checkbox"/> カ[期待のなさ] <input type="checkbox"/> キ[生徒の意欲] <input type="checkbox"/> その他 ()
	2. グループ内での役割分担がうまく機能していない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> カ <input type="checkbox"/> キ <input type="checkbox"/> その他 ()
	3. 授業中、生徒に対して意欲的に指導を行っていない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> カ <input type="checkbox"/> キ <input type="checkbox"/> その他 ()
	4. 生徒のやる気をうまく刺激できない。	<input type="checkbox"/> ア <input type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ <input type="checkbox"/> カ <input type="checkbox"/> キ <input type="checkbox"/> その他 ()

・「総合的な探究の時間」のその他の課題点について

▷質問④-4：「総合的な探究の時間」に関する以下の項目のうち、

あなたが、課題点だと思うものを全てチェックしてください。

	項目
	1. 中学校での「総合的な学習の時間」が活かされていない。
	2. 教育委員会からの正確な情報共有が十分でない。
	3. 探究学習（目的やカリキュラムなど）について保護者への説明が十分に行われていない。
	4. 生徒の成果物の発表が地域の方々や保護者に共有されていない。
	5. 大阪府内の学校間で探究学習の充実度に差があると感じる。
	6. 大阪府内の学校間で、探究学習の課題点や指導方法などの共有がない。
	7. コンピューターが十分に利用できる設備・環境がない。
	8. 特になし
	9. その他（ ）

ここから下の質問は、全員回答をお願いいたします。

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

⑤「探究」を通じて生徒に身につけて欲しい技能・能力に関する調査

あなたが考える「総合的な探究の時間」において“生徒に身につけて欲しい技能・能力”について、以下の質問にお答えください。

▷質問⑤-1：

この質問では、「総合的な探究の時間」の授業を通して高校生に身につけて欲しい個人的な技能・能力について伺います。

次ページに記載されている1～11の技能・能力について、あなたが高校生に最も身につけて欲しいと考えるものを、1位から3位まで選び、次ページの記入欄に番号でお答えください。

1. 主体性
(最初から最後まで責任感をもって自ら考え、行動する力)
2. 問題発見力
(探究活動を進める上で、生じる課題や問題を自ら考え、発見する力)
3. 問題解決力
(疑問が生じた時、すぐに教員などの大人に頼らず自ら考え、解決する力)
4. 総合力
(各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を探究活動において総合的に働かせる力)
5. 自己理解力
(自らの得意・不得意や、興味のあることを見つけ、それらに対する理解を深める力)
6. 好奇心
(色んな物事に興味・関心を持ち、意欲的に知ろうとする力)
7. 社会貢献意欲
(よりよい社会を実現しようとする情熱を持ち、積極的に社会に働きかけようとする力)
8. 表現力
(自らの考えを適切な態度や言語で示す力)
9. 状況把握力
(自らやチームの置かれている状況を適切に把握する力)
10. 情報活用能力
(膨大な情報の中から必要な情報を見極め、適切に活用する力)
11. ソフトウェア活用力
(PowerPoint や Word などのアプリや PC の機能を、必要に応じて十分に使いこなせる力)

最も 身につけて欲しい	2 番目に 身につけて欲しい	3 番目に 身につけて欲しい

▷質問⑤-2:

この質問では、「総合的な探究の時間」の授業中の協働経験を通して高校生に身につけて欲しい技能・能力についてお聞きします。

下記の1～7の技能・能力について、あなたが高校生に最も身につけて欲しいと考えるものを1位から3位まで選び、下の記入欄に番号でお答えください。

1. 発信力
(自分の意見をプレゼンテーションなどで適切に表現し、他者にわかりやすく伝える力)
2. 働きかける力
(周囲に対して積極的に働きかけ、必要に応じて人を巻き込みながら進める力)
3. 生徒間のコミュニケーション力
(チームの中でグループのメンバーと適切に意思疎通する力)
4. 外部の方とのコミュニケーション力
(行政や企業の方など、探究活動をする中で関わる外部(学校外)の方と適切にコミュニケーションを取る力)
5. 受容力
(自分と違う意見をもった人、立場が違う人がいることを認め、尊重する力)
6. 傾聴力
(相手の意見を注意深く聞く力)
7. 整理力
(グループ内で起こる様々な考えを整理し、まとめる力)

最も 身につけて欲しい	2番目に 身につけて欲しい	3番目に 身につけて欲しい

▷質問⑤-3: 先程の質問⑤-1,2で選択された技能・能力について伺います。

貴校で実施されている「総合的な探究の時間」のプログラムは、それらの技能・能力を習得するためにどのくらい有効だとあなたは思いますか。

左列の当てはまる項目にチェックしてください。

<input type="checkbox"/>	有効である
<input type="checkbox"/>	どちらかと言えば有効である
<input type="checkbox"/>	どちらとも言えない
<input type="checkbox"/>	どちらかと言えば有効でない
<input type="checkbox"/>	有効でない

役職・担当について

差し支えなければ、あなたの貴校での現在の役職・担当を記入してください。

--

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

○インタビュー調査について

さらにインタビュー調査にご協力いただける方は氏名・連絡先のご記入をよろしくお願いいたします。
ご記入いただいた方には、今後インタビュー調査をお願いすることがございます。

インタビュー内容につきましては、

- ・高校の教育現場が、大学生と協力して「探究」の授業を設計することに対する意識
 - ・どのように大学生が、「探究」の授業に関わることが望ましいと思われるか
 - ・高校教員が、高校教育において大学生にしてほしいことや期待すること
- などをお伺いする予定です。

新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点より、zoomや電話によるインタビューを予定しております。（*対面でのインタビューも可能です。）

インタビューにご協力して頂ける方は

以下に"氏名・勤務校・ご連絡先"のご記入をお願い致します。

氏名：()
勤務校：()
ご連絡先（メール）：()

また、高等学校の「探究」等での大学生が関わるプログラム実施についてご意見、ご要望、ご質問等ございましたら、下記のメールアドレスにご連絡ください。

高大連携教育団体 SUIT（すいっと）

担当：藤井拓海（大阪大学人間科学部2年）

連絡先：suit.edu.info@gmail.com

別紙(質問④-1、④-2、④-3 回答結果)

質問④-1: 「総合的な探究の時間」における教員間の課題点のうち、あなたが特に課題だと思う点を表1の1～11の項目から最大3つまでお選びください。次に、その原因・理由に当てはまるものを下記の項目ア～オから全て選択し、右の列にチェックしてください。

表 A) 質問④-1 課題点に対する原因・理由の選択肢

理由：ア [時間不足]
授業準備等で忙しく、議論に十分な時間が割けないから。
イ [認知不足]
探究学習そのものの理解・認知が十分でないから
ウ [人手不足]
教員数が少なく、人手が足りていないから。
エ [連携不足]
探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから
オ [期待のなさ]
探究学習による教育効果に期待していないから。

表 B) 質問④-1 の回答結果(有効回答数:15)

質問④-1	回答数
1. 同学年間で、探究学習の目的・意義の共有が十分でない。	6
2. 他学年間で、探究学習の目的・意義の共有が十分でない。	7
3. 同学年間で、カリキュラムの共有が十分でない。	1
4. 他学年間との、カリキュラムの共有が十分でない。	3
5. 指導方法について、教員間であまり議論されていない	4
6. 授業の進行状況を共有できていない。	1
7. 教員間で生徒への指導方法や課題点の共有がなされていない。	2
8. 同学年間で授業の振り返りが十分に行われていない。	3
9. 他学年間で授業の振り返りが十分に行われていない。	6
10. 特になし	0
11. その他	5

表 ㉔) 質問④-1 それぞれの課題点の原因・理由の回答数

	ア、 時間不足	イ、 認知不足	ウ、 人手不足	エ、 連携不足	オ、 期待のなさ	その他
1	5	5	3	1	2	1
2	6	5	3	4	1	1
3	1	1	0	0	1	0
4	2	1	2	1	0	1
5	3	3	1	1	1	0
6	1	1	0	0	0	0
7	2	1	0	0	1	0
8	3	1	1	0	0	0
9	6	2	3	2	1	0
10	0	0	0	0	0	0
11	0	2	1	0	1	3

質問④— 1

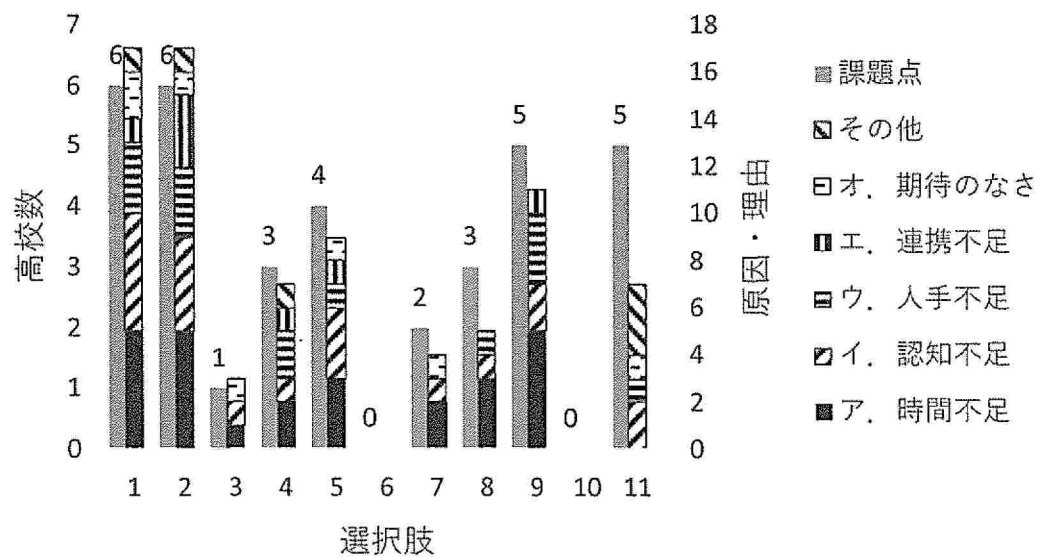


図1) 質問④—1結果

▶質問④-2:「総合的な探究の時間」における教員間の課題点のうち、あなたが特に課題だ
 と思う点を表2の1～9の項目から最大3つまでお選びください。次に、その原因・理由
 に当てはまるものを下記の項目ア～オから全て選択し、右の列にチェックしてください。

表 D) 質問④-2 課題点に対する原因・理由の選択肢

理由：ア [時間不足]
授業準備等で忙しく、議論に十分な時間が割けないから。
イ [認知不足]
探究学習そのものの理解・認知が十分でないから
ウ [人手不足]
教員数が少なく、人手が足りていないから。
エ [連携不足]
探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから
オ [期待のなさ]
探究学習による教育効果に期待していないから。

表 E) 質問④-2 の回答結果(有効回答数:15)

質問④-2	回答数
1. カリキュラム（授業計画）の作成が難しい。	10
2. クラス間で、授業の進行に大きな差がある	2
3. カリキュラム（授業計画）通りに授業が進行していない。	0
4. 教員一人あたりの負担が大きい。	12
5. 生徒の評価基準がはっきりと決まっていない。	10
6. 探究学習が生徒にどのように役立っているかよく分からない。	2
7. 授業を通して明らかになった課題点を改善できていない。	2
8. 特になし	0
9. その他	0

表 F)質問④-2 それぞれの課題点の原因・理由の回答数

	ア. 時間不足	イ. 認知不足	ウ. 人手不足	エ. 連携不足	オ. 期待のなさ	その他
1	8	4	4	2	1	2
2	2	1	1	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0
4	9	4	8	3	1	1
5	6	5	3	1	0	3
6	1	2	1	1	2	0
7	2	1	2	1	0	0
8	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0

質問④ー2

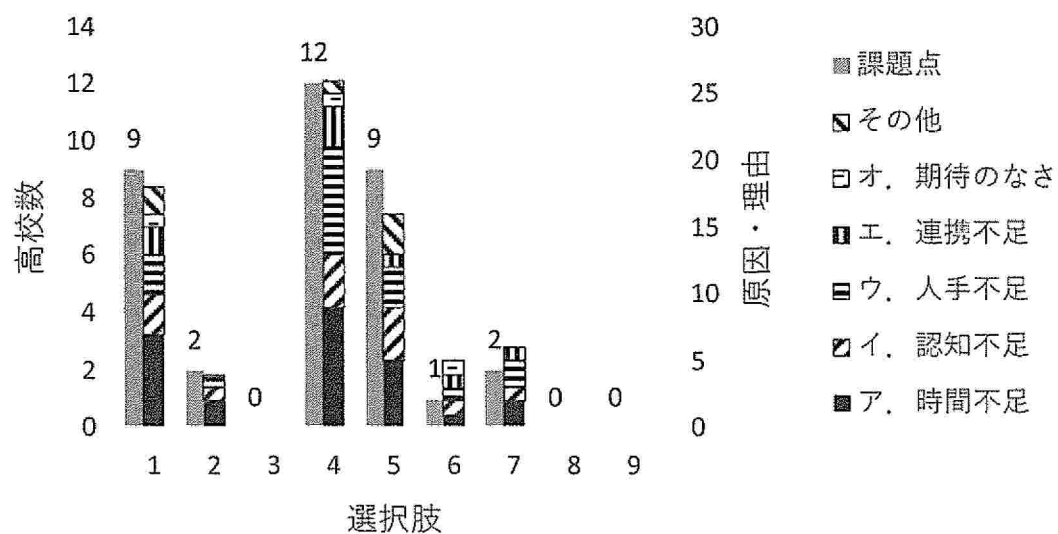


図2)質問④ー2結果

▶質問④-3：あなたが思う、貴校の「総合的な探究の時間」における生徒への指導上の課題点を表3の1～14の項目から最大3つまでお選びください。次に、その原因・理由に当てはまるものを下記の項目ア～キから全て選択し、右の列にチェックしてください。

表 G) 質問④-3 課題点に対する原因・理由の選択肢

理由：ア [認知不足]

教員間での探究学習そのものの理解・認知が十分でないから。

イ [カリキュラム議論不足]

教員間での探究のカリキュラム作成に関する話し合いが十分でないから。

ウ [指導に関する議論不足]

教員間での生徒への指導に関する話し合いが十分でないから。

エ [人手不足]

教員数が少なく、人手が足りていないから。

オ [連携不足]

探究学習に関わらず、教員間の連携があまり機能していないから。

カ [期待のなさ]

探究学習による教育効果に期待していないから。

キ [生徒の意欲]

授業に対して生徒が前向きでないから。

表 H) 質問④-3 の回答結果(有効回答数:16)

質問④-3	回答数
1. グループの進度に応じた的確な指導ができていない	2
2. グループ内での役割分担がうまく機能していない。	0
3. 授業中、生徒に対して意欲的に指導を行っていない。	1
4. 生徒のやる気をうまく刺激できない。	7
5. “課題の設定” に対する指導が難しい。	9
6. “情報の収集” に対する指導が難しい。	5
7. 情報や意見の “整理・分析” に対する指導が難しい。	7
8. 成果物の “まとめ・表現” に対する指導が難しい。	2
9. Word や PowerPoint などの操作が苦手な生徒への指導が難しい。	2
10. 生徒に対して、探究学習の振り返りを十分に促していない。	4
11. クラス内で生徒の成果物の共有がなされていない。	0
12. 他クラスとの間で生徒の成果物の共有がなされていない。	0
13. 特になし	0
14. その他	0

表 1) 質問④-3 それぞれの課題点の原因・理由の回答数

	ア. 認知不足	イ. カリキュラム 議論不足	ウ. 指導 に関する 議論不足	エ. 人手 不足	オ. 連携 不足	カ. 期待 のなさ	キ. 生徒 の意欲	その他
1	1	0	0	2	1	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	0	0
3	1	1	1	0	1	0	0	0
4	4	4	6	2	1	1	1	0
5	3	3	3	1	1	1	2	4
6	2	2	2	2	1	1	0	2
7	3	2	2	2	0	0	0	1
8	2	1	2	1	0	0	0	0
9	0	0	0	1	0	0	0	1
10	2	2	3	2	1	1	0	1
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	0	0	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0

質問④-3

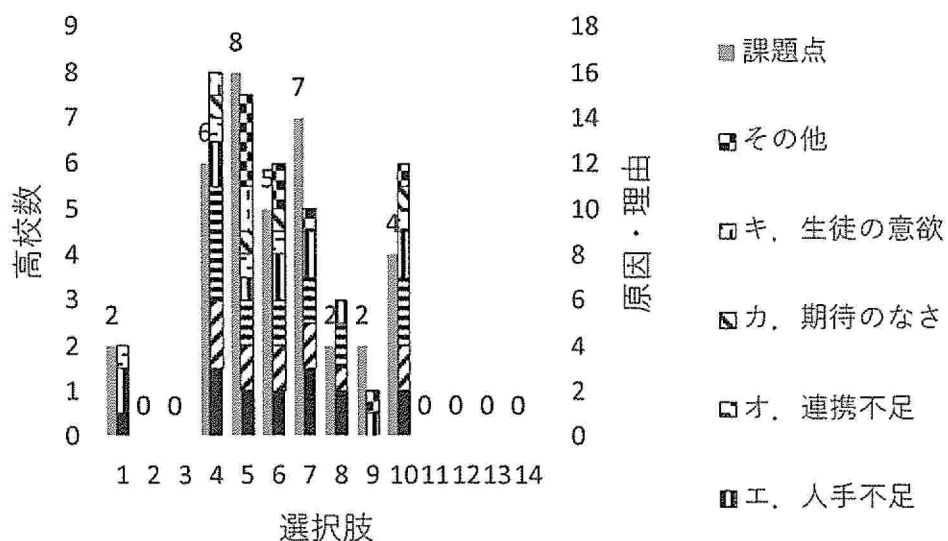


図3) 質問④-3結果